

王戎、阮咸の七人て、世に之を竹林の七賢といふ。すべて此の頃は清談といふことが流行り、何もせずに、世間を離れて、風流三昧に世の中を送つて居ると云ふ風があつた。竹林の七賢は即ち其の親玉株である。「古への七の賢き人」と萬葉集には敬つたが、竹の中では嘸藪蚊にお困りだつたらうと皮肉を言つた人もある。

七賢人は希臘にもあつた。(一)雅典のソロン、此の人の格言は「己を知れ」、(二)ミレトスのタレス、此の人の格言は「保證を嫌ふ人は確實だ」、(三)プリネのピアス、此の人の格言は「世の中の人は大抵は悪人」、(四)スバルタのカイロー、此の人の格言は「終局を考へよ」、(五)リンドスのクレオビエーロス、此の人の格言は「極端を避けよ」、(六)ミチリネのピタコス、此の人の格言は「機に乗ぜよ」、(七)コリントのペリアンダー、此の人の格言は「勤勉には敵が無い」。竹林の七賢に比ぶれば、すべて眞面目である。

日本には七福神がある。恵比壽、大黒天、毘沙門天、辨財天、福祿壽、壽老人、布袋。其の中で純粹の日本人らしいものは恵比壽一人。大黒、毘沙門、辨財の三人は印度。福祿壽、壽老人、布袋の三人は支那である。七人の中辨財一人が婦人。六歌仙の小野小町といふ格である。財貨、長命、子寶、武勇など色々なものを欲する願望をあらはしたもので、七難即滅、七福即生といふ語から、かういふ組合が出来たのである。これが一同同船したのが即ち正月二日の寶船の圖である。中にも恵比壽、大黒は長者の神として富貴の象徴と敬はれたが、維新以後神佛分離と極つて、恵比壽は神様になり、大黒は佛様に屬したから、相並んで坐る事も尠くなつた。併し近頃までは一圓札などに其の福々しい顔が描かれてあつたが、これも近頃はとんと見當らぬ。今の紙幣には武内宿禰や、和氣清麿や、菅原道真や、日本古來の名臣の肖像が畫かれる事になつた。恵比壽様はいつの間にかビールの名となつて、最も廣く知られて居る。

七福神の持つて居る寶物には、隠れ簀、隠れ篋、打出の小槌など色々あるが、佛敎でいふ七寶は、金、銀、瑠璃、砗磲、瑪瑙、玻瓈、眞珠。日本で貴い産物の七寶は世界に其の名を轟かして居る。

佛家の七情は喜、怒、憂、懼、愛、憎、欲。禮記では喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲。

耶蘇舊敎で七罪といふのが、(一)傲慢、(二)忿怒、(三)猜忌、(四)飽食、(五)色慾、(六)貪慾、(七)懶惰。佛敎の五戒よりは三つ多い。五戒は殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒。

昔の支那の掟で、我が國の法律にも採用した妻の七去は、(一)父母に順ならざれば去る。(二)子無ければ去る。(三)多淫なれば去る。(四)妬なれば去る。(五)惡疾あれば去る。(六)多言なれば去る。(七)竊盜すれば去る。第一、第三、第七は今日でも申分は無いが、第二、第四、第五、第六などは十分に能く事情を

調査しなければ俄かに決定する譯には行かぬ。現今の民法で裁判上の離婚の訴をなし得る場合は精密に規定してある。皆いづれも已むを得ぬ事情の時に限られてある。昔の法律では妻を去るといふので、夫の權利ばかりを規定したが、今の民法では、夫婦ともに或程度までは同等の權利を認めてある。決して男丈の我儘を許さない。

男尊女卑は東洋の特色であるといふ人もあるが、日本の歴史を考へると、さうでは無い。第一皇室の祖先天照大神が農業に熱心な神として、兄弟に友愛な神として、しかも或時には武勇な神として、誠によく日本人の氣質をあらはして居られるのを見ると、決して女子を賤しんだのでは無い。又天鈿女命が種種の功績を挙げたのを見れば、女子としても随分國家の爲に働いた人があることが分る。鈿女命などは今日でいへば、さしあたり勳一等寶冠章を佩ふべき人である。

國常立神、豐雲野神、次は宇比遲邇神、妹須比知邇神、次は角杵神、妹活杵神、次は意富斗能地神、妹大斗乃辨神、次は游母陀流神、妹阿夜訶志許泥神、次は伊邪那岐神、妹伊邪那美神、これが古事記にいはゆる地神七代の神々。

神代の歴史では大國主神の事蹟が最もくはしい。此の神には七つの御名がある。大國主、大物主、大己貴、葦原醜男、八千戈、大國玉、顯國玉、時の人、又後世の人が其の徳を慕つて附けた名である。

軍記物で誰も知つて居るのは、賤が岳の七本槍。福島正則、加藤清正、加藤嘉明、平野長泰、脇阪安治、糟谷武則、片桐且元。其の中で最後まで秀頼を輔佐して苦衷を竭したのは片桐且元、一番槍よりもつらかつたに相違ない。

頼朝が石橋山の戦から逃延びた時の七騎落は謡曲に作つて、土肥實平の忠義と父子恩愛の情を歌つてある。「所詮此の船中に、命二つ持ちたらんずるものを御船より下され候へ」と、父子の命を一つと見た武士道的精神があらはれて

居る。

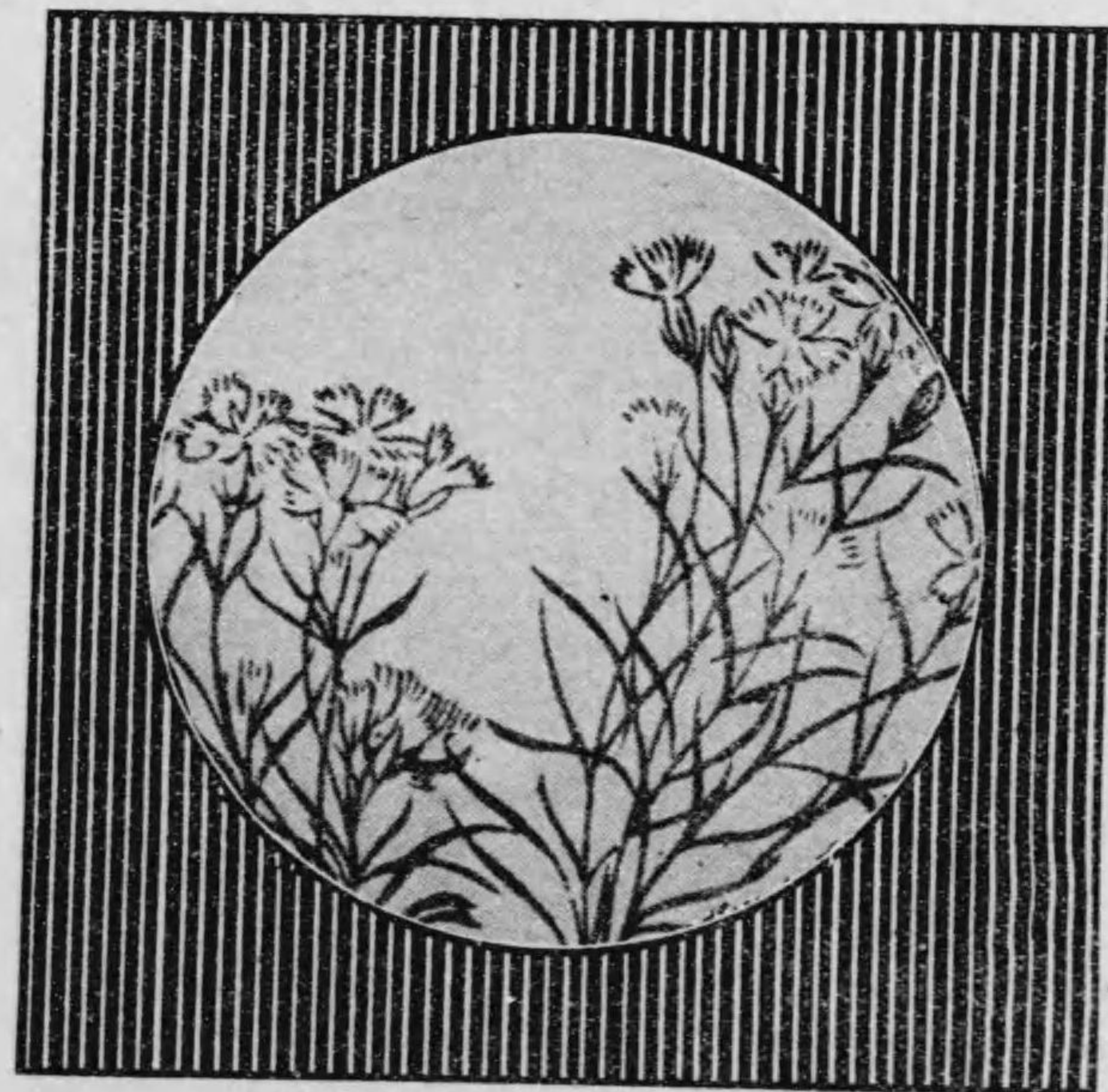
鎌倉の七座といふのは、絹の座、炭の座、米の座、檜物の座、馬の座、千朶の座、相物の座、商賣人の株である。今も鎌倉には材木座といふ地名がある。

正月七日に七草を打つことは餘程古い事である。鎌倉時代の桐火桶といふ歌の書に、七つづ、七度、都合四十九回叩くと書いてある。これも支那から来た風俗で、悪い鳥の渡つて来ないやうにと、明りを滅して、板を打つたのである。七草をたたく時のはやし詞に、「唐土の鳥、日本の鳥渡らぬ先に」といふのは之が爲である。此の悪い鳥は鬼車鳥といつて梟のやうなもの。好んで人の爪を取るから、取られてはならぬと、昔は正月七日は必ず爪を切つた。七草をゆてた湯で爪を洗ひ、さうして切つたさうである。習慣といふものは色々をかしな事をするものである。七草は芹、薺、はこべら、ごぎやう、佛の座、すいな、すいしろである。七種を献上した始は醍醐天皇の時であるといふ。

名数雑談

七種献上は京都の七野が順番に受持つた。即ち紫野、北野、大原野、内野、平野、嵯峨野、蓮臺野である。

秋の七草は
萬葉集の山上
憶良の歌に、
秋の野に
咲きたる花を
をよび折りか
き數ふれば七
草の花。



(畫原琳光)コシデナ中の草七の秋

萩の花、尾花、葛花、なでしこの花、女郎花、又藤袴、朝顔の花。とあるから、古い事が分る。其の中の朝顔といふもの

に就いては色々議論がある。勿論今の朝顔ては無い



(畫原琳光)ギハ中の草七の秋

七夕は支那の牽牛織女といふ男女の星が一年に一回天の川を渡つて逢ふといふ傳説が本で、これも支那と交通以來、直ちに日本に流行した。萬葉集の歌にも澤山タナバタの歌が見える。今でも京都以西ではまた此のお祭をするが、東京地方では殆ど廢つた。

北斗七星の支那の名は天樞、璇、璣、權、玉衡、開陽、搖光。

(八)

八の數で讀者諸君の第一に想出されるのは近江八景であらう。何となればそれは諸君が小學校の讀本に於て學ばれたからである。八景では、晴嵐、夕照、夜雨、暮雪、秋月、歸帆、落雁、晚鐘の八つが取つてあるが、それは同時に見られる景色では無い。就中秋月と夜雨などは矛盾であるし、暮雪は更に一季遅れて居る。若し時候を構はず選ぶならば、何故に、春の花などが省かれてある

か。要するにこれは支那の眞似であるからである。支那の洞庭湖の景色に、瀟湘の八景などいふものがあるので、繪にも描かれるし、詩にも歌はれる。當時支那に入つた禪僧などが、これを有難がつて日本に輸入したのであらう。日本で大きい湖といへば、まづ近江の湖水であるので、直ちに、瀟湘の八景を移して、前記の八景の名を造り出したのである。禪宗坊主の詩集などを見ると、自分のお寺や、附近にも、何々八景、何々十三景などと、色々勝手に拵へて居るが、琵琶湖の八景は流石に場處も廣いし、始めてこれを選んだのが、近衛政家といふ時の従一位太政大臣であるといふので、最も廣く行はれるやうになつたものらしい。この事は五十三次にも述べた。家元の瀟湘の八景といふものは、江天暮雪、瀟湘夜雨、山市晴嵐、遠浦歸帆、煙寺晚鐘、平沙落雁、漁村夕照、洞庭秋月といふのであるが、遠浦だの、煙寺だの、漁村だのといふので、確とした地名の無いのは近江八景よりは面白く無い。近江八景と同様、東京の

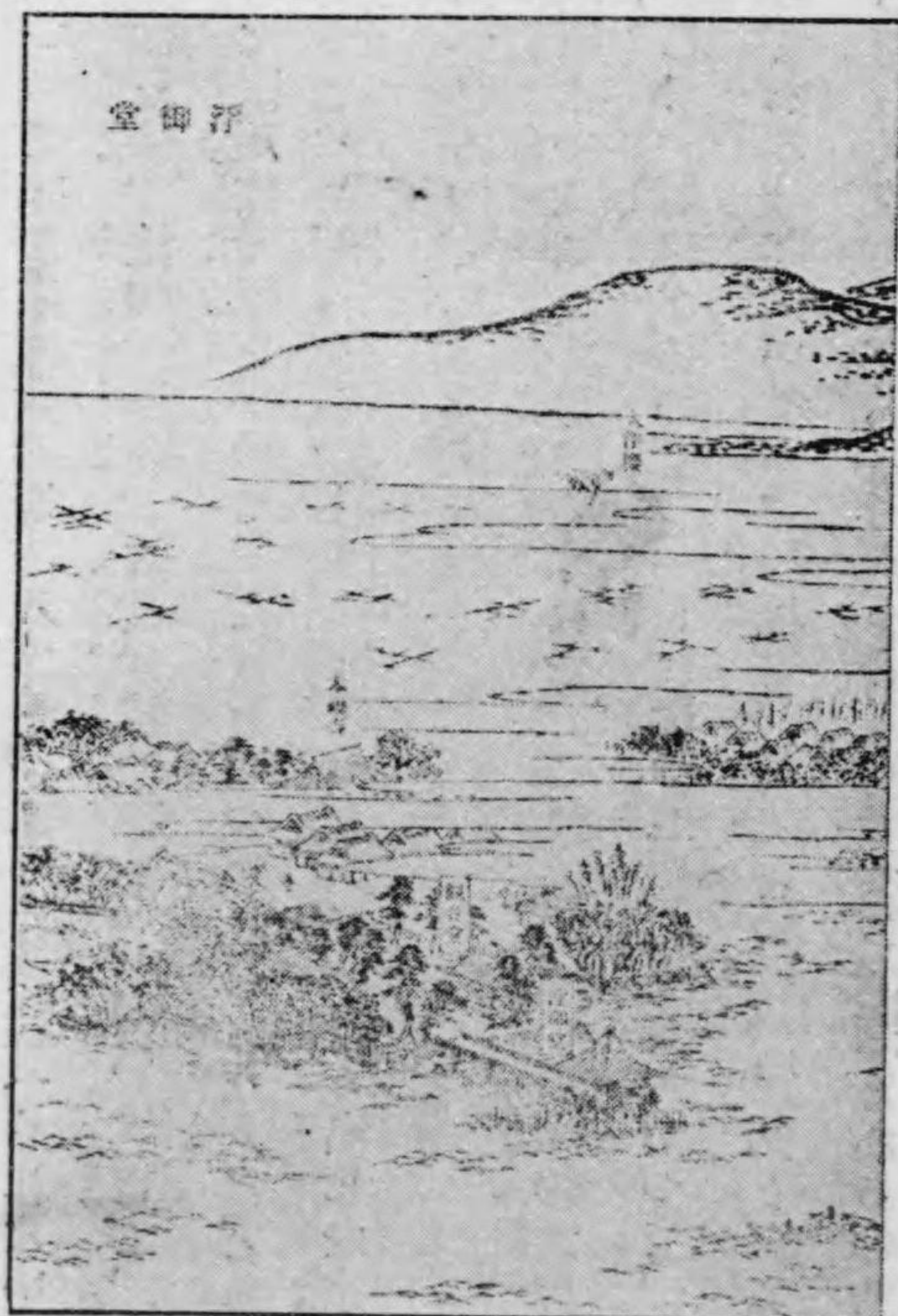
近傍で知られて居るのは金澤八景であるが、これも支那その儘の名稱。それを日本化したのは奈良の八景で、南圓堂の藤、佐保川の螢、猿澤池の月、春日野の鹿、三笠山の雪、雲井阪の雨、東大寺の鐘、轟橋の行人。此の方が何となくつかしい。とにかく此の八景といふことは一時大に行はれたもので淨瑠璃の文句の中などにも八景といふことは澤山用ゐられて居る。

佛敎で禪宗とい



堂御浮の田堅一の中景八江近

ふのは鎌倉以後盛になつた宗派で、北條足利の世には鎌倉、京都に五山などといつて、有名な坊主も澤山居り、絶えず支那へ往復して、彼の國の文物を輸入して



(堂御浮よれ入しき月てけあ錠)

來た。此の頃は坊主の外は行くものが無いので、支那人は日本人といへば、悉く頭を剃つて衣を着て居るものと思つて居たさうだ。平安時代の初頃にも禪宗が既に傳はつて來たが、行はれない。武家時代になつて、武家の保護を受け、

武家の風と或點は投合する所があり、武士教育をも助けて、次第に盛大になつたのである。武士教育のみならず、此等五山の禪僧たちが研究して居つた漢學殊に朱子派の儒學が發達して徳川時代の儒學が起り來つたのである。それはさておき、かく遅くはいつて來た宗派故、例の八宗といふ中には數へられない。佛教で八宗といふのは三論、法相、俱舍、成實、律、華嚴、天台、眞言で、昔のえらい坊さんの中には八宗兼學といつて、これをすつかり學んだ人などもあつた。日蓮宗や、淨土宗や、淨土眞宗などは、皆日本人が後に造り出した宗旨で日本的佛教といふべきものである。

昔平安の世には八講といふことが盛行はれた。これは法華經の中の大事な所を講師が質問に應じて、解釋するので、一日に朝夕二座の講義があつて、四日でも終ひになるのである。序にいふが、學校で、講義といひ、講師といふのは皆佛教の用語から轉じて來たのである。宮中新年御歌會に講師とあるのも同

様である。昔の佛教の盛んであつた有様は推測される次第である。

恐しいのは佛教で説く八大地獄。等活、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間。

大寶令の制度で定められた役所の數は八つ。中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内。これを八省といつた。各省の長官は卿。次官は輔。明治の初年に各省の長官を卿といひ、次官を大輔、少輔などいつたのは、王政復古だから之に據られたのである。

天武天皇の御世に八性を立てられた。いはゞ今の爵のやうなもの。それは眞人、朝臣、宿禰、忌寸、道師、臣、連、稻置で、諸君は多分日本歴史で學んだ事であらうとおもふ。

昔十二月の月に特に幣帛を奉らせられた八墓といふのがある。それは、一多武峯、藤原鎌足。二愛宕護、藤原冬嗣。三葛野、仲野親王。四後葛野、當宗氏。

五宇治、藤原基經。六小野、藤原高藤。七後小野、宮道。八後宇治、仲野親王女班子。之を荷前の使といつた。近親の墓を優遇されたので、時代によつて變つて居る。古今集を第一の勅撰集として、後撰拾遺の二集を合せて三代集といふことは前にもいつたが、更に其の後の御拾遺集、金葉集、詞花集、千載集、新古今集の五つとともに和歌八代集と稱へる。

唐宋八大家は韓愈字は退之、柳宗元字は子厚、歐陽修字は永叔、(以上唐)曾鞏字は子固、王安石字は介甫、蘇洵字は明允、蘇軾字は子瞻、蘇轍字は子由。文明を支那に仰いて唐以來の文化に浴した我が國民は更に歐米の文明を輸入して採長補短、今では却つて支那人が續々と日本へ學びに来る。日清、日露の二大戦役を経て、我が國運の發展は益加つた。日本の古名を大八洲といつたのは、本道の外、淡路、九州、四國、壹岐、對島、隱岐、佐渡の島々を併せての稱であるが、今は此の外に北海道がある、臺灣がある、澎湖島もある、樺太

の半分がある。おまけに朝鮮の全部まで我が天皇の御領土となつた。其の大方は皆今の御世に新附したことを思ふと、實に明治陛下の御稜威の御盛な事を思つて有難い御代に生れ出た幸福を喜ばずには居られぬ。

朝鮮は八道に分れて京畿道、江原道、咸鏡道、平安道、黃海道、忠清道、慶尙道、全羅道といつたが、今は其の中の咸鏡、平安、忠清、慶尙、全羅の五つを更に南北に分つて朝鮮十三道となつた。此の十三道にはそれく、道廳があつて長官が赴任して居る。つまり内地の縣のやうなもので、長官は即ち知事である。

關八州といふのは相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野の八箇國で、東海道の國が六つ、東山道の國が二つである。これは歴史家の説に據ると、阪東といふ語と混同したので、阪東の阪は即ち碓日阪の東て右に擧げた八國をいふのである。關東の關は愛宕、鈴鹿、不破の三關の東の意味であるから、

實は關東二十八國で無ければならぬ。古くは阪東八箇國、東八箇國などとはかり言つたのが、いつの間にかそれを關東八箇國といふやうになつたのである。關八州の八將と言はれたのは下總の千葉、結城、下野の小山、安房の里見、常陸の佐竹、小田、下野の宇都宮、那須である。

安房の里見の家來に、犬といふ文字を苗字の頭に戴いた八士があつたので、馬琴はそれから思ひ付いて、これを仁義禮智忠信孝悌の八徳に配して、南總里見八犬傳を作り出したのであらう。

(九)

里見の八犬士と能く似て居るのは尼子の九牛士。牛尾遠江、牛田源五兵衛、牛岡草之助、牛川飛右衛門、牛井吞衛門、牛尿踏右衛門、牛田鋤右衛門、牛引夫兵衛、牛飼糠右衛門。すべて其の苗字と名との關係のある所が滑稽である。

就中奇抜なのは牛尿踏右衛門、牛飼糠右衛門である。

鎌倉の執權九代時

政を第一として其の子義時、義時の子泰時、泰時の子時氏、時氏の子經時、其の弟時頼、時頼の子時宗、時宗の子貞時、貞時の子高時。中に賢明を以て知られて居るのは泰時、時頼であるが、元寇に對



鎌倉執權九代の中の人物

しビクともしなかつたのは七代の時宗、頼山陽が「相模太郎膽如」
といつたのは眞に
壯快である。山陽
は外史に論じて、
父祖の罪惡を一人
で償つたと言つて
居る。數年前特に
從一位を贈られた。

我が國の女帝は九代を數へ奉る。推古、皇極、齊明、持統、元明、元正、孝謙、稱徳。それから久しく無かつたが、徳川になつて秀忠の女東福門院の産み奉つた明正天皇がお立ちになつた。皇室典範の御規定に據ると、今後は女帝は無い筈である。

九族といふのは高祖、曾祖、祖、父、己、子、孫、曾孫、玄孫即ち自分より上四代、下四代をいふ。一人出家すれば九族生天などといふことを信じて、小供一人だけは坊主にした時代もある。

人の身體には穴が九つある。目が二つ、耳が二つ、鼻が二つ、口が一つ、下の方に二つ。之を九竅と言つたのも昔の人の説。不精密な言方である。

人を九等に分つて上上、上中、上下、中上、中中、中下、下上、下中、下下に分けたのは學校の試験の點數のやうである。上上が優等生、下上あたりからは落第生である。

佛法で説く極樂淨土にも九つの品等がある。上中下の三品に各三生があつて、上品上生、上品中生、上品下生などといふのである。之を九品の淨刹といふ。

天の九野といつて天を九つに分けたのも支那人の説である。鈞天(中央)、蒼天(東方)、旻天(東北)、玄天(北方)、幽天(西北)、皓天(西方)、朱天(西南)、炎天(南方)、陽天(東南)。

支那人の陰陽説では九は陽の極數であるから、最も盛な數と認められたのである。それ故日本でも昔時の鐘は九の數を本と立てた。即ち子丑寅卯の十二刻に九を乗じて、其の端數を採つたのである。

子	一九が九	九ツ
丑	二九、十八	八ツ
寅	三九、二十七	七ツ
九		

卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
四九、三十六	五九、四十五	六九、五十四	一九が九	二九、十八	三九、二十七	四九、三十六	五九、四十五	六九、五十四
六ツ	五ツ	四ツ	九ツ	八ツ	七ツ	六ツ	五ツ	四ツ

子は夜の十二時、午は晝の十二時、共に九つ時である。午前二時の丑の時と、午後二時の未の時とはともに入つ。夜明方の卯の時と暮方の酉の時とはともに入つてある。昔の小説本等に明六つ、暮六つなどあるのはそれである。七つ下

りの羽織などといふのは餘程古くなつたことをいふので、坪内氏の早く書かれた小説には午後四時過の着物などと今の時刻に直されてあつた。

(十)

木火土金水の五行を甲乙丙丁戊己庚辛壬癸に配してキノエ、キノト、ヒノエ、ヒノト、ツチノエ、ツチノト、カノエ、カノト、ミヅノエ、ミヅノトと言ふのは、木の兄、木の弟、火の兄、火の弟、土の兄、土の弟、金の兄、金の弟、水の兄、水の弟の意味である。それを子丑寅卯等の十二支に重ねるから六十の干支が生ずる。六十で一廻りするのである。昔は年月日を算へるのに、すべて之を用ゐたのである。これは今でも随分広く用ゐられて居るから知つて居らねばならぬ、戊申の詔勅、丁酉倫理會などは勿論、自分は申の年だとか、子の年だとか言ふ。併し夫を獸類に配當して色々の迷信をするのはをかしいとてである。

十幹の異名は漢文の本などには時々出て居つて、困しいから左に擧げて置く。

關逢 (甲)	旃蒙 (乙)	柔兆 (丙)
強圉 (丁)	著雍 (戊)	屠維 (己)
上章 (庚)	重光 (辛)	玄默 (壬)
昭陽 (癸)		

八墓とともに荷前の使を立てられた十陵は天智天皇陵、光仁天皇陵、桓武天皇陵、平城天皇陵、仁明天皇陵、文德天皇陵、其の外に施基皇子、早良親王でいづれも天皇の尊號を奉られた御方、又贈太皇太后の高野氏、藤原氏である。これは清和天皇のお定めになつたのである。

尼子十勇士といふのは九牛士よりも名前に變化があつて面白い、山中鹿之助、安宅庵之助、寺本生死之助、尤道理之助、早川鮎之助、藪中荆之助、横道兵庫之助、小倉鼠之助、深田泥之助、植田早苗之助。

孔子の門人十哲は顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏。

芭蕉翁の十哲は其角、嵐雪、許六、去來、支考、丈草、北枝、曾良、野坡、越人。こんな類のは尙澤山ある。

(十一)

徳川の世幕府では昌平學校を建てたが、各藩でもそれ／＼學校を拵へて、藩士を教育した。其の中で早いのが、出羽米澤の興讓館、筑前名島の名島學校、加賀金澤の明倫館、經武館。備前岡山の閑谷學校、尾張名古屋の明倫堂、肥後熊本の時習館、薩摩鹿兒島の造士館、奥州會津の日新館、長門萩の明倫館、伊勢津の有造館等で、之を十一學舎といつた。獨逸に二十二大學あるなどといふのも、つまりはかういふ大名の學校が残つて居るのである。我が維新の改革は

すべてを打壊して學校まで根本から無くなつて仕舞つたのは惜しいことであつた。併しそれ程の決心であつて、始めてあの改新が出来たのであらう。

(十二)

我が國で始めて冠位の制を立てられたのは推古天皇の十一年、聖德太子の御はからひであつた。即ち徳、仁、禮、信、義、智の六つに各大小があつて併せて冠位十二階。それから後も度々變つて大寶令の制度では一位から初位まで三十階になつて、これが一番長く用ゐられた。

- 正一位 從二位 正三位 從四位上 正五位上 從六位上
- 從一位 從二位 正三位 從四位下 正五位下 從六位下

- 正七位上 從八位上 大初位上
- 從七位下 從八位下 小初位下

現今は四位以下の位の下が無くなり、初位といふのも無いから一位から八

位まで正從併せて十六階である。

大内裏の御門は東面のが陽明門、待賢門、郁芳門、南面のが美福門、朱雀門、皇嘉門、西面のが談天門、藻壁門、殷富門、北面のが安嘉門、偉鑿門、達智門、これを十二宮門といふ。

前中書王、後中書王のことは前にも言つた通り、中務卿になられたから、支那風に中書王といつたのである。さういふ様に唐人らしく言ふのが十二人ある。前後中書王の外に野相公(小野篁)、善相公(三善清行)、紀納言(紀長谷雄、紀淑望)、菅相公(菅原是善)、菅三位(菅原文時)、江相公(大江音人)、後江相公(大江朝綱)、在納言(在原行平)、東山左府(洞院實熙)、

古樂の十二調子には特殊な讀方があるから知らねばならぬ。壹越、斷金、平調、勝絶、下無、雙調、息鐘、黄鐘、鸞鏡、盤涉、神仙、上無。

十二の數は一年の月の數である。陰曆でも陽曆でも月の數は同じであるし、

二でも、三でも、四でも六でも割切れる數故甚だ便利でもある。それ故度量衡等の基本數に用ゐた事も尠くない。十二ペンスが一シルリングになり、十二インチが一呎にあたる類である。日本では膳でも椀でもまづ十人前と揃へるが、西洋ではナイフでもフォークでも、十二人前即ち一ダース一揃とする。ハンケチでも十二枚が一組、鉛筆でも十二本を一括りにしてある。十二を完全の數として見るのである。

佛敎で説く十二因縁は無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死。

藥師如來の十二神將は宮毗羅大將、伐折羅大將、迷企羅大將、安底羅大將、類彌羅大將、珊底羅大將、因達羅大將、波夷羅大將、摩虎羅大將、眞達羅大將、招杜羅大將、毘羯羅大將。

(十三)

西洋では十三の數を忌んで、十三人のお客などは決してしない。併し東洋では別に之を嫌はない。孝徳天皇の御代に定められた冠位は十三階であつた。織、繡、紫、錦、青、黒これに各大小があり、其の外に建武といふのが一つ。併せて十三階であつた。



足鐙原藤しめ古を位高最の階三十

である。

和歌勅撰二十一代集の中から八代集を差引いての残りを十三代集といふ。即ち新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今、頻りに新の字を冠させたが、歌としては却つて陳腐なのが多かつた。

支那の十三經は易經、書經、詩經、禮記、孝經、論語、孟子、周禮、左傳、公羊傳、穀梁傳、儀禮、爾雅。何時の頃から言出したことか分らぬ。其の注疏は、全體で四百十六卷ある。

皇族宮方のお坐りになつた門跡は十三宮門跡で、輪王寺(天台)、仁和寺(真言)、大覺寺(真言)、妙法院(天台)、聖護院(天台)、照高院(天台)、青蓮院(天台)、智恩院(淨土)、勸修寺(真言)、梶井宮(天台)、曼珠院(天台)、毘沙門堂(天台)、圓滿院(天台)。故北白川宮能久親王殿下は維新前には即ち輪王寺門跡。故

小松宮彰仁親王殿下は仁和寺門跡でいらせられたのである。

(十五)

十五尼丘尼御所は大聖寺宮(禪)、寶鏡寺宮(禪)、曇華院宮(禪)、光照院(四宗兼學)、靈鑑寺宮(禪)、圓照寺宮(禪)、林丘寺(禪)、中宮寺宮(真言律)、慈愛院殿(禪)、三時知恩寺殿(淨土)、法華寺殿(律)、瑞龍寺殿(日蓮)、總持院殿(禪)、寶慈院殿(禪)、本光院殿(天台)。昔は内親王、女王方が皆からいふお寺に入らせられたのである。

(十六)

伊勢神宮では佛の混淆を許さないて齋宮の十六の忌詞がある。次の通りである。

佛 ぶつ ナカゴ
 經 きやう ソメガミ
 塔 たふ アアラギ
 寺 じ カハラブ
 僧 そう カミナガ
 尼 に メカミト
 齋 さい ガカタソナ
 死 し ナホル
 血 けつ アセ
 墓 ぼ ツチクレ
 優婆塞 うぱさい ツノハズ



十六羅漢の一名前一度や二度聞いても覺えられないものではない。賓度羅跋情閣

十六羅漢の一名前一度や二度聞いても覺えられないものではない。賓度羅跋情閣

病 びやう ヤスミ
 打 だ ナヅ
 祠堂 しだう カウモエ
 哭 く シホタル
 肉 にく クサピラ

尊者、迦諾迦伐蹉尊者、迦諾迦跋釁惰閣尊者、蘇頻陀尊者、諾矩羅尊者、跋陀羅尊者、迦理迦尊者、代闍羅弗多羅尊者、戍博迦尊者、半託迦尊者、羅怛羅尊者、那伽犀那尊者、因揭陀尊者、伐那婆斯尊者、阿氏多尊者、注荼半託尊者。

(十七)

大内裏の十七殿。

紫宸殿 ししんでん 仁壽殿 にじゆでん 承香殿 じゆきやうでん 常寧殿 じやうねいでん 貞觀殿 ぢやうくわんでん
 春興殿 しゆんこうでん 宜陽殿 ぎやうやうでん 綾綺殿 りやうきでん 溫明殿 おんめいでん 麗景殿 れいけいでん
 宣耀殿 せんやうでん 安福殿 あんふくでん 校書殿 けうしよでん 清涼殿 せいりやうでん 後涼殿 こうりやうでん
 弘徽殿 こうきでん 登花殿 とうくわでん

(十八)

唐の太宗の世の十八學士と稱せられたるは、

- | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 杜如晦 | 房玄齡 | 于志寧 | 蘇世長 | 薛收 | 褚亮 | 姚思廉 |
| 陸德明 | 孔穎達 | 李玄道 | 李守素 | 虞世南 | 蔡允恭 | 顏相時 |
| 許敬宗 | 薛元敬 | 蓋文達 | 蘇勗 | | | |

前に話した十三經注疏の中易經、書經、詩經、左傳、禮記等の疏は此の孔穎達が作つて居る。

支那の歴史、史記、漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、唐書、五代史、宋史これが十八史で、元の初の人、曾先之が其の概要を摘んで記したのが即ち十八史略。此の書日本に傳はつて大流行したが、支那では却つて行はれなかつたといふ。十八史に元史を加へれば十九史、遼史、金史を加へて二十一史といひ、明史を加へて二十二史といひ此の外に舊唐書、舊五代史の補修を加へて二十四史といふ。支那と

いふ國は實によく革命をする國である。今度共和制にてもなれば又一つ歴史が殖える譯である。

(二十一)

日本は萬世一系、和歌三十一代集などといつても天皇の御代御代を一代と申すのであつて、皇統の連綿たることは敷島の道と共に昔も今も變りはない。前にいつた十三代集に古今から新古今までの八代集を加へたものが即ち二十一代集である。

(二十四)

曆を開いて見ると立春節だの、雨水節だのと書いてある。これは時候の名で一月に二度づゝ大抵四日から八日までと十九日から二十三日までとにある。小寒から大寒を、俗に寒の中といふ。立春で春が立ち、雨水では雪が雨に變る節、

草木も芽を出し始める。啓蟄は即ち冬籠した蟲が再び這出るのである。春分は晝夜平分の時。野も山も美しくなるのが清明で四月の初。春雨がしめやかに降つて穀物を養ふといふ意味で穀雨。五月の初が立夏。次が小滿、草木が繁茂して天地に滿つる初故小滿といふ。芒種は稻を植ゑる時節。夏至は日の最も長く夜の最も短い時節。ついで小暑。大暑。立秋。處暑といふのは暑が止むといふ意である。白露は露の下りる節の意。秋分は秋の晝夜平分。十月の初が寒露節。段々寒くなつて十月の末が霜降。其の次が立冬。小雪。十二月になつて大雪。冬至は日が最も短く夜が最も長い時である。毎月二つづつて都合二十四節である。

雪中節を掘つて親に薦めたのは孟宗といふ人。孟宗竹と竹の名にもなつて知らぬ人は無い。かやうな孝子二十四人を集めて二十四孝といふ。

- | | | | | | | |
|----|-----|----|----|----|----|----|
| 大舜 | 漢文帝 | 曾參 | 閔損 | 仲由 | 董永 | 剡子 |
|----|-----|----|----|----|----|----|

- | | | | | | | |
|-----|-----|----------|----|----|----|----|
| 江革 | 陸績 | 唐夫人 | 吳猛 | 王祥 | 郭巨 | 楊香 |
| 朱壽昌 | 庾黔婁 | 老萊子 | 蔡順 | 黃香 | 姜詩 | 王褒 |
| 丁蘭 | 孟宗 | 黃庭堅 (山谷) | | | | |

支那は孝を第一の教と立てるので、かういふ善行を頻に賞美したのである。併しよく考へて見ると、随分中にはをかしいのがある。鯉を得ようと氷の上に寝て居たなどは甚だ知恵の無い話で、焚火でもして氷を解かす方がどの位早手廻しかも知れぬ。又親の爲に自分が蚊にさされて居たのもつまらない話。貧乏で子供が養はれないから、其の小供を地中へ埋めようとして金の釜を發見したといふことなどは、誠に不感心な話である。元の時代の郭居業といふ人が作り出したものださうで、すべて極端な世俗談に過ぎないが多い。

(二十五)

二十四孝より一つ多のが二十五菩薩、阿彌陀佛を念ずれば此の菩薩達が始終守つて下さるのだといふ。觀世音菩薩、大勢至菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩、普賢菩薩、法自在菩薩、獅子吼菩薩、陀羅尼菩薩、虛空藏菩薩、德藏菩薩、寶藏菩薩、金藏菩薩、金剛藏菩薩、光明王菩薩、山海惠菩薩、嚴王菩薩、珠寶王菩薩、月光王菩薩、日照王菩薩、三昧王菩薩、定自在王菩薩、大自在王菩薩、自爲王菩薩、大威徳王菩薩、無邊身菩薩、書いて見ると中々面倒だ。昔の坊さんがササと書いて菩薩の略字としたのも無理は無い。

(二十六)

今の東京即ち昔の江戸城には二十六城門があつた。竹橋門、和田倉門、櫻田門、馬場先門、日ヶ谷門、田安門、半藏門、清水門、雉子橋門、一つ橋門、神田橋門、常磐橋門、吳服橋門、數寄屋橋門、山下門、鍛冶橋門、芝口門、幸

橋門、虎門、赤阪門、四谷門、市ヶ谷門、牛込門、小石川門、筋違門、淺草橋門。市區改正や何かで段々と昔の形が無くなつて行く。

(二十八)

東西南北の方角で星座二十八宿を認めた支那の天文学、一方角に七座つゝ、

- (東)角(すば) 亢(あみ) 氏(と) 房(ひそ) 心(なか) 尾(おし) 箕(み)
- (南)斗(ひつ) 牛(みな) 女(を) 虚(とみ) 危(やめ) 室(むろ) 壁(か)
- (西)奎(き) 婁(た) 胃(い) 昂(すば) 畢(ふり) 觜(き) 參(から)
- (北)井(ち) 鬼(たま) 柳(ゆり) 星(ほし) 張(ちり) 翼(たす) 軫(ちん)

(三十)

諸君は軒下の提燈に三十番神と書いたのを折々見られるであらう。あれは天台宗の坊さんが、日本の神々が毎日交代で佛法を守護せられるのだと説いて、

三十日に割當てたのである。

熟田	諏訪	廣田	氣比	氣多	鹿島	北野
江文	貴船	伊勢	八幡	加茂	松尾	大原野
春日	平野	大比叡	小比叡	聖眞子	客人	八王子
稻荷	住吉	祇園	赤山	建部	多賀	兵主
苗鹿	吉備津					

立派な社は大抵はいつて居る。不埒千萬なことを言つたものだ。

(三十二)

紫宸殿の障子に三十二人の支那の人物を畫かれたのを三十二の賢聖障子と云ふ。

馬周	房玄齡	杜如晦	魏徵	諸葛亮	遼伯玉	張良
----	-----	-----	----	-----	-----	----

今の京都の御所の紫宸殿にもある。

(三十三)

一番は「補陀落や岸打つ波は三熊野の」の那智寺を始として西國三十三番の札所は二番紀三井寺、ついで粉川寺、横尾寺、藤井寺、壺坂寺、岡寺、長谷寺、南圓堂、三室戸寺、醍醐寺、岩間寺、石山寺、三井寺、今熊野、清水寺、六波羅密寺、六角堂、草堂、良峯寺、穴太寺、總持寺、勝尾寺、中山寺、清水

第五倫	管仲	鄧禹	子産	蕭何	伊尹	大公望
傅説	仲山甫					
李勤	虞世南	杜預	張華	羊祜	楊雄	陳寔
班固	桓榮	鄭玄	蘇武	倪寬	文翁	董仲舒
賈誼	叔孫通					

寺、法華寺、書寫寺、成相寺、松の尾寺、長命寺、蘆浦寺、竹生島寶嚴寺、谷汲寺。紀州から始つて大和山城近江美濃で終つて居る。此の巡遊の道筋を書いた名所圖會も出來て居る。又之に倣つて東國にも三十三番の札所がある。

(三十六)

藤原公任卿が選んだ三十六歌仙は、

(左)人丸、躬恒、家持、業平、素性、猿丸太夫、兼輔、敦忠、公忠、齋宮女御、敏行、宗子、清正、興風、是則、小文君、能宣、兼盛。(右)貫之、伊勢、赤人、遍昭、友則、小町、朝忠、高光、忠岑、賴基、信明、順、重之、元輔、元眞、仲文、忠見、中務。

これが本で其の後、後の六々撰といふものが出來、新三十六歌仙も出來、鎌倉時代の三十六歌撰、女房三十六歌仙など色々ある。石川丈山は詩仙堂を築い

て支那の詩仙三十六人の肖像を掲げた。其名は(左)蘇武、謝靈運、杜審言、李白、王維、高適、儲光義、韋應物、韓愈、劉禹錫、李賀、杜牧、寒山、林逋、梅堯臣、歐陽修、黃庭堅、陳興義。(右)陶潛、鮑昭、陳子昂、杜甫、孟浩然、岑參、王昌齡、劉長卿、柳宗元、白居易、盧同、李商隱、靈徹、邵雍、蘇舜欽、蘇軾、陳師道、魯幾。

名數は數限りもない。赤穂の四十七士、東海道五十三次、源氏物語の五十四帖、孔子の七十二弟子、四國の八十八箇所、まだ言ひ度いことも澤山あるが、あまり長くなると退屈故、雑談は一まづこれにて擱筆。

名數雜談終

大正元年十月二日印刷
大正元年十月五日發行

東海道五十三次

定價金六拾錢



著者

芳賀 矢一

發行者

東京市神田區裏神保町九番地
合資會社 富山房

右代表者

同所合資會社 富山房社長
坂本 嘉治馬

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目拾貳番地
藤本 兼吉

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目拾貳番地
株式會社 秀英舎第一工場

發行所

東京市神田區
裏神保町九番地

合資會社

富山房

電話本局一〇三六、四一三〇、四四四三番
振替口座東京五〇一番

五冊に分ちたる新装幀本の特賣
文學博士 瀨川秀雄先生著

西洋全史

洋裝美本全五冊
本文紙張式千六百餘頁
附圖大小百二十二圖
特價金拾圓(定價)
送料(内地四十八錢、支、鮮、一圓十錢、檳、九、十、錢)

新元大正の大國民は一日も早く世界の大勢に通じて國運の興隆に貢獻するを要す。世界各國の實情を知悉して英の強大、獨の堅實、米の殷富、佛の豪華等々其由て來る所を究むべきなり。これ蓋し讀史の大目的にして日露の協約も日英の同盟も乃至は移民問題、外資輸入も日々新聞紙上外國電報の報する所、論議する所、一として世界歴史を基礎として解釋せられざるは無かるべし。歴史を知らずして現今の活動社會に立つは石を抱いて淵に臨むが如し。誰か之を危ぶまざらんや。記せよ世界歴史の正確なる知識を有するは我中流以上の人士の資格上必備の義務なるを。西洋全史は二千六百餘頁と附圖とを以て五千年來世界の推移變遷を詳述し、著筆殊に近世に重きを置き其紛糾錯綜を極めたる時代に於ては史論微に入り細を穿ち秩序整然として一絲亂れず、讀者をして岐路に彷徨せしむるの弊なからしめたり。而もか史論公平にして肯綮に當り、叙說懇切にして急所を衝く。全社會に於ける人類の總記録としては本書實に拔群の聲名を博せるもの。法制、軍事、外交、通商、宗教、科學、文學、美術の各方面に於ける現代文明の先進者たる人々の事業は本書悉く之を包含して遺すことなし。

今茲に改元を紀念せんが爲め三千部限り實費特價すべし。

東京高等師範學校教授 林泰輔先生新著

最新刊 朝鮮通史

菊判六百餘頁
石版着色地圖
定價貳圓廿四錢
郵稅十錢

朝鮮の歴史は我帝國新領土の歴史にして國史の一部を占め一般國民の知悉せざる可らざるもの也。蓋し朝鮮は蕞爾たる半島なれども、東洋の咽喉に位し大國必争の衝に當り、其安危存亡は直に我邦の得失消息に關す。特に其關係の深きを原ぬれば遠き神代の昔より近く併合の運命に至るまで、其間幾千年。或は我邦に朝貢し、或は支那に屬隸して其波瀾の重疊起伏せる、其關係の複雑多なる。朝鮮史の泰斗として造詣最積等、史家執筆の難事に屬せり。林先生は、朝鮮史の泰斗として造詣最積年の蘊蓄を傾けその博識と如炬の史眼とを此一大編を成せり。これ本書が從來の學界の缺を補ふと教育界に裨益を與ふるとに於て、確に刻名編たるべし。下必讀書の第一位を占むべく、將た政事家、宗教家、軍事家には必ず必讀の

青年の士は今後須らく本書に依り朝鮮史の研究に歩武を進め益々その發展を策するに努むべし。

田中前宮相題字 高知縣立農林學校長農學士辻重忠先生共著
平田前內相題字 同 農林學校教諭小關豐吉先生共著

賜野中兼山天覽

先生は大經世家なり大政治家なり大人格者なり。本書は此の偉人の事蹟を盡して餘蘊なきもの文章雄健麗致、偉人の面目躍々飛動せんとす。而して本書は先生の勳業を天聽に達したるもの也。青年學生諸君の修養に資すべきは決して疑なき所也。

●立志成功の活教訓！

堀内新泉先生新著 明治の二宮尊徳

天の無情、親戚の刻薄、幼時に於ける貧苦窮乏の悲惨艱難、金次郎尊徳以上の者あり。況んや難治の病に罹る。而も屈するなく、全國を踏破して殖産工業を研究すること八年病癒えて歸れば村民飢餓に瀕す。於是蹶然奮起、熱烈に勤儉主義を唱導實行し、村民の眠を攪破し、一致結合力を盡して殖産興業に努力し、終に健全なる模範自治村を作り、農民の眠を一郷の鎮守と尊ばれたる奮闘男兒の一代記、各人の活教訓、農村の最良範、青年者必讀の快著也。

洋裝菊判全一冊 三百五十餘頁
◎定價金九拾錢
◎郵稅 八錢

菊版全一冊 三百餘頁
寫眞版一圓入
定價金一圓

文學博士白鳥庫吉先生序
文學士專攻史內 互先生編

東洋讀史地圖

大判 横一尺五分 縦八寸
口繪華夷圖(イロタ)
大小 廿九圖
局部圖約二十
解說約廿頁

東洋の覇權を握れる日本國民の最深く研究を要するは東洋歴史也。歴史の舞臺は地上に在り、而も東洋の地理たる區域尠大、關係錯綜、専門の學者と雖も之が沿革を詳にするに苦む。是れ從來此種の良書更に無き所以也。著者此缺を補はんと欲し、其博覽と卓識とを以て、多年の研究索搜を重ね、以て本書を大成す。其詳を盡し明を極め、讀史家唯一の參考たるは暇々を要せず。

目要書本

- 口畫華夷圖(一頁)コロタイプ刷各圖解説
- 禹貢九州圖(一頁)
- 春秋時代要地圖(一頁)
- 戰國時代亞細亞形勢圖(二頁)
- 戰國七雄圖(一頁)
- 秦一統圖及漢初封建圖(一頁)
- 前漢拾參韻壹百五郡國圖(一頁)
- 前漢武帝時代亞細亞形勢圖(二頁)
- 後漢時代亞細亞形勢圖(二頁)
- 三國時代亞細亞形勢圖(二頁)
- 晋初亞細亞形勢圖(二頁)
- 東晉時代之滿洲及朝鮮(一頁)
- 南北朝時代亞細亞形勢圖(二頁)
- 隋代亞細亞形勢圖(二頁)
- 唐代亞細亞形勢圖(二頁)
- 唐代之滿洲及朝鮮(一頁)
- 五代氏時代亞細亞形勢圖(一頁)
- 宋金對立時代亞細亞形勢圖(二頁)
- 元初亞細亞形勢圖(二頁)
- 元代之朝鮮半島(一頁)
- 明初亞細亞形勢圖(二頁)
- 歐人新地檢出時代(二頁)
- 李氏朝鮮(一頁)
- 明末亞細亞形勢圖(二頁)
- 清初亞細亞形勢圖(二頁)
- 露國之亞細亞侵略(一頁)
- 英國之印度侵略(一頁)
- 日清日露戰役圖(二頁)
- 現代亞細亞形勢圖(二頁)
- 現代支那全圖(二頁)
- 計二十九圖外二局部圖約廿

文學博士 吉田東伍先生著

好評 忽ち 維新史八講

菊判全一冊 二百八拾餘頁 定價金壹圓

五版

●東京朝日曰く「本書は在來類似のものとは復に撰を異にし、薩長と云はす水幕と云はず總ての方面に於て其裏面背面より揣摩のを見を逞くし皮肉を穿ち、攻者も守者も勝者も敗者も其有らん限の權機を悉く暴露し盡されたる一種異様の維新史也。幕府衰亡史也。此書は讀むに從て益々興味あり。最後に近づけば近づく程勝者の醜態多く摘發せられ、歩一步佳境に進みて一度此書を手にする者、必や巻を終へずば止まざるべし。讀んで面白き事此書の如きは近來絶えて無くして僅に有る所とす。」(下略)

文吉先 博士 東生 士伍著

日韓古史斷

菊判全一冊 六百餘頁 定價金二圓廿錢

日韓合併が必然的約束なりしことは古史に徴すべし。本書は博士が壯年時代の傑作にして内外の史書舊新のもの博く採りて參照せざるなく、關係緊密對比切實々々の明を致し、求めて足るを知らず。古代紀年の差謬を考定して荒唐渺漠の陋を去り、假想偽態を亂撃打破して遺蹟所なきを破壞し、國勢世運の變轉を論じ、骨體種國部族の盛衰を相するに鐵案斷々、舊史の假想偽態を亂撃打破して遺蹟所なきを破壞し、國勢世運の變轉を論じ、骨體種國部族の盛衰を相するに鐵案博士に請ひて復刻し、部數を限りて發賣す。大方の諸君子必ず本書を手にとせられよ。刻下必讀の珍籍なれば也。おに

組織的、科學的の支那全志出現す!!
大島大將、福島中將、内田外相 陸軍大尉山縣初男先生新著
後藤男爵、星野少將閣下題序

最新支那通志

菊判全一冊 六百餘頁 定價金貳圓

廣袤七十餘萬、人口四億、東洋の富源、世界の大市場。鄰邦なる我國人の最も注目すべきは支那なりとす。素より四千年來の古國文獻乏しからざれども、其多くは漢學者流の迂遠に非れば、十數年前の記述若くは一地方の志に限るのみ、活きたる支那の研究亦至難の事に屬す。著者夙に之を慨し、彼國に在る事前後十箇年、其間力を支那研究に委れ、精確なる實蹟調査を積みし結果本書を大成す。即ち全支那の疆土を網羅して、首尾貫通し、中外照照し、地文及地理上の記述明快著、藩鎮邊境を包括して、形然たる支那全志を構成し、而して偏精偏略の嫌なく、冷靜に布置按排の妙を極む。本書出版して、始めて此の老國は科學的に解剖分析せられたりと謂ふべし。今や清朝亡びて民國政府の前途顧る遠慮、隨つて支那研究の必要倍々切實なるの日に當り、眼を茲に着くるの人士は決して本書を逸す可らず。

文學博士 重野安釋 河田巖兩先生同輯

第九版 訂正 支那疆域沿革圖

略說共全二冊 圖面縦一尺七寸横一尺二寸 石版着色刷 定價金貳圓五拾錢 小包料(六百元以内)

支那歷代沿革圖に從來好著なし、是れ讀史家の深く遺憾とする所なりき。本圖は精確なる支那圖に基き、歴史及秘密外諸國の沿革に及、上下三千年間歷代諸國の伸縮を一目の下に瞭然とらしめ、且別に略說を附し、其治亂興廢の由を簡明に解説し、以て完璧たらしめたり。蓋し讀史家の座右一本を缺くべからざるもの也。今般更に大訂正を加へて改訂したるに、蓋し讀史家の座右一本を缺くべからざるもの也。今般

携必家史讀

147

文學博士坪井九馬三先生著

(菊判美本全一冊四百六十八頁挿圖四十
七地圖十八葉、定價金貳圓送料十二錢)

西洋史要

最輕便にして堅實なる
記事のアプツデー
なるは本書也

本書は博士が普通學科として西洋史を講義せらるゝ時備忘の主旨にて携帶せらるゝ博士選述の西洋史要略也其記事は上古に起り一昨年迄の迄、上下五千年に亘れる史實を僅に數百頁中に藏めたるものにて其文章は簡にして要を摘み、史實に充ちて些の冗事無し。文意の及び難き所は挿圖地圖原語索引を添へて參考に備へたり。本書の原本は博士の常に携帶せらるゝ手澤本にして補正の朱書入の挿紙錯綜し容易に讀み難きものなり。本書を携帶するの讀者は常に博士に親炙するの感あらむ。今や西洋史の好參考書を望むの時、博士に請ふて本書を公刊する所以也。

陸軍教授 依田雄甫先生編纂

第九版

訂正 增補 世界讀史地圖

四六倍判(圖面縦八寸、横一尺一寸)洋裝美本●
略説(菊判紙數二百餘頁)●
共全二冊●石版色刷大小百十九圖

定價金壹圓九拾錢
小包料金拾貳錢

ちぐりす地方及地中海沿岸諸國●希臘及希波戰地●歷山帝國及現今露國南侵●古代伊太利●羅馬戰地●羅馬帝國●古代東洋●古佛建國●北人遠征●神功皇后征韓●兩漢五代入唐航船●五湖渤海契丹突厥●十字軍●遠宋夏●金蒙古帝●伊達使節の進路●元兵航路●安土住地●支那朝鮮に對する遠征(倭寇)●豊公征韓●暹羅平定●宗教改革●エリサベス時代●三十年戦争●普佛戰爭●露國の四自利略●水主左平等の沿革●北米の沿革●印度安南巴密布哇●海陸軍●管區日清戰地●中央歐洲●威佛戰爭●土耳古沿革●七バスト●航路電線●日露交戰●旅順包圍●奉天會戰●露艦航路●人口人種宗教●諸國興亡●其他數十種

392
344

終